

～医療生協健文会の職員のみなさま～

# メロス通信 不定期便



Vol.39

2026年1月号

発行 地域福祉室

## 新年のご挨拶

野田 浩夫

あけましておめでとうございます。

地域福祉室「メロス」開設後4年を経過し、5年目を迎える新年となります。

この間、変化があったと思うのは、地域の貧困や生活困難に向ける私たちの想像のリアルさと、対処の本気度が磨かれたことです。

自分の陰性感情を抑え込まず直視して支援の出発点とすること、当面解決できない難しいケースでもつながりを維持してその状態に耐えること（ネガティブ・ケイパビリティ）の大切さも発見しました。

また「ケアの倫理」カンファレンスは、支援の目を患者さんから仲間たちに向けて広げたものでした。弱い立場の人を支援することで、支援する人自身が弱い立場に追い込まれていくことがあります。端的な例としては、家族を介護しながら勤務している同僚のことを思い浮かべて貰えばいいと思います。それだけでなく、「どうしようもない人」のことを見捨てられないで支援を続けている場合もあります。そういうとき私達自身が追い込む側になることもあります。そういうとき

「医療機関のできることには限界がある」とよく言われます。本当でしょうか？「ケアの倫理」カンファレンスには、そうした私達を閉じ込める「見えない檻（おり）」を壊す力があるのです。

今後進めたいことは医療・介護・福祉の連携を住民本位の「仕組みとして」広げることです。顔が見える関係は大切ですが、この先、人がどう変わってもこれまでの連携が損なわれず蓄積される型を作っていくたいと思います。それが連携の質を本当に高めるものです。

もう一つは、自治体との交流を盛んにし私達の影響力を強くすることです。交渉を頻繁にして、自治体の組織図を超えて内部の動態をよく知るだけではなく、自治体側の施策に対して、いわば市民の声の代表として私達がどう思うかを相手が気にせざるをえないような存在に私たちがなっていくことを、次のステージとして目指したいと思います。



## 宇部地域食料支援は大成功に終わりました —皆さまご協力ありがとうございました—

開催場所をリハステップげんきに移し、1月10日（土）に宇部地域の食料支援が開かれました。職員、組合員の参加は21人、食材配布だけでなく炊き込みご飯の炊き出し、無料バザー、カフェなども行いました。利用者は80名、自宅に届けるケースもあります。無料バザーにはたくさん品々がならび、ゆったりとしたカフェスペースでは今まで以上に会話がすすみ参加者全員の一体感が生まれました。新たに4人のボランティアの申し入れがあり、これまで頑張ってきた組合員さんが「こういうのがしたかったんです！」と喜びの声が上りました。これからも地域に開かれた健文会としてこの取り組みを大切にしていきます。

## ご協力いただいた職員の声です ーご苦労様でした！ー



### 地域連携室 森田 のぞみ さん

私がお手伝いした衣料品コーナーでは、寒波前日という事もあり、ズボンや羽織る物等、必要な物を具体的に探す来場者も多く、寄付された衣料品が再び役立てられていると実感しました。会場はカフェコーナーでの談笑もあり温かな雰囲気で、次回はボランティアとして参加したいという声も。助け合いの輪が広がる場だと感じました。

あっという間に時間が過ぎる程楽しい体験で、若い職員さんにもぜひこの雰囲気を味わってほしいと思いました。

### 宇部協立病院医局秘書課 林 ちひろ さん

1月10日、地域の方を対象とした食材支援に初めて参加しました。開始前から長い列ができ、地域のニーズの高さに驚くとともに、準備に奔走する組合員さんの熱意に圧倒されました。

私はカフェスペースを担当し、物資を受け取った方へ飲み物を提供しました。利用者が多く賑わいを見せる中、会話の輪に入る難しさも実感しましたが、お子さん連れの方と交流する貴重なひとときも持てました。積極的に声をかける組合員さんの姿に、対話の大切さを改めて学びました。

多くの支えで成り立つこの活動に、今後は学生さんも交えることで、より多世代が学び合える場にしていきたいです。この経験を今後の業務にも活かしていきます。